

分裂病症例の現存在分析からみた ひとつのつまづきの構造

宮崎 俊明

Struktur des menschlichen Verfall unter Berücksichtigung
der Daseinsanalyse von schizophrenischen Patienten

Toshiaki MIYAZAKI

「彼奴きやつの身の上はやがてわがこと」

(ソフォクレス『アイアス』)⁽¹⁾

1：まえがき 一 個人的な一

1964年、京都大学大学院にいたわたしは1年間その附属病院の精神病棟に通った。医学部の加藤清助教授による精神衛生の特別講義のためである。当時、この病棟から通学していた同級生がいて、見舞のためには何度か病棟に入っていたが、赤煉瓦造りの鍵つきの閉鎖病棟ははじめてだった。隔週の臨床授業では、ひとコマでひとりの入院患者がその第一診察室で担当医加藤助教授と面談した。われわれ5名の参加者はそれを記録し、患者の退室後は隣室でその臨床例の内容コメントや診断所見を聞き、質疑応答の機会をもてた。

それ以前にわたしは、キャンパス・シンドローム（大学症候群）論のカウンセラー（石井完一郎）や、ヴィクトール・フランクル（Viktor Frankl）のロゴセラピーの人間学講義（下程勇吉）などをうけたりした。河合隼雄はまだいなかった。これらは新しく制度化された講座「教育人間学」に関係していた。ドイツではすでに1920年代にマックス・シェラー（Max Scheler）らによる哲学的人間学が誕生し、戦後60年代からはパラダイムは実存主義にかわる人間学への変容をみせていた。30種に及ぶ論著の邦訳があるボルノウ（Otto F. Bollnow）もその一例だが、情緒的ともいえるその甘さはエビゴネン垂流と映った。一般に哲学的人間学のもとにある、この教育人間学にも現象学と西田哲学の底流もみえて、ドイツ的であり京都的でもあった。この時期の精神医学も、村上仁や木村敏など、フランス哲学やハイデガー（Martin Heidegger）と関わる方向をもち、京都学派ともいえる傾向をみせていた。

わたし自身は、教育をめぐるヨーロッパ思想史の専攻者にすぎず、専攻外だが、文献上は一定の

渉獵はしていた。時代も時代、思想の風土も風土であり、心理的には暗い時代、政治的には激動の前夜だった。さきのカウンセリングの授業では大江健三郎の『われらの時代』でレポート課題があったほどである。内外の実存思想や文学作品、加えて禅宗寺院での生活など、これらも精神医学領域への関心につながったと思う。いずれにしても、この病棟での授業は学部からの在学9年間でもっとも刺激的であり興奮にみちていた。

これを機に、ルードヴィヒ・ビンスワンガー (Ludwig Binswanger) に関心をもち、邦訳などなかった当時、七百頁をこすその大著『人間現存在の基本形式と認識』『失敗した現存在』『論文集』などと向き合った。そして、課程修了論文ではビンスワンガーも援用することになる。ただ、これは、わたしのペスタロッチ研究とも無縁でなかった⁽²⁾。すでに、戦後のスイスで、ビンスワンガーの立場からペスタロッチの教育実践行為を読み解いたバッハマン (Werner Bachmann) の著書『ペスタロッチの社会論の人間学的基礎論』(1947)があったからである⁽³⁾。かれら3人はすべてチューリヒを活動や研究の舞台にした同国人だった。このバッハマンは、1968年、フランクフルトからアダルベルト・ラング (Adalbert Rang) の『政治的ペスタロッチ』がアドルノ (Theodor Adorno) の序文をもって登場するまで、ペスタロッチ研究のひとつの典型を示していた⁽⁴⁾。

ビンスワンガーの現存在分析へのわたしの関心は、その後、フロイト派の精神分析への興味にもつながり、その主要な著書を日独照合で読み込んだが、これらは70年代末にフランクフルト学派のハーバマス (Jürgen Habermas) の解釈学的社会学のテキストを追うなかでも、一定程度保持してきた⁽⁵⁾。そして1982~83年、マールブルク大学に留学中、ハイデガーの後期思想でもって分裂病に『自然的自明性の喪失』の現象をとりだした精神医学の教授ブランケンブルク (Wolfgang Blankenburg) を知り、そこに初期思想に立脚したビンスワンガーとの間で類似や発展の系譜をみた。実は、ハイデガー、ハーバマス、ブランケンブルク、この3人もマールブルク大学と関係している⁽⁶⁾。

本稿は上記の臨床授業での課題レポートを一部変更したものである。そこでは男女各1名の入院者(1964年4月26日, 12月7日)の症例を中心に分析したが、本稿では最終章での二, 三を除き、文献の追加はない。なお、いまここでこのような旧稿をあえてもちだすのには、以下のふたつの理由がある。ひとつは、1999年6月12/13日、京都国際会議場でDAAD (ドイツ学術交流会) が主催した「独日における学術交流-批判的総括-」での木村敏による基調講演である⁽⁷⁾。かれは、ドイツ学問の日本への受容のひとつの典型として精神医学ないし医学的人間学をあげ、それが一方で京都学派の哲学と結びめをもつとしながら、他方でカルチュラル・スタディーの新しい波のなかで、いわば東洋的精神医学として今後有望かつ特異な方向をはらむ、とする見解にふれたからである。もうひとつの理由には、近年のスクール・カウンセリングの盛況があり、ひとの存在理解への不十分さ、技術的手法の安易さ、加えてその制度化を強めるシステムがひとと教育世界を掘り崩しかね

ないことに懸念をもつからである。

2：ある女性入院者（26歳，女性） — 現存在の場（空間）の構造 —

医師：どうですか。

女性：不安です。身が千切られそうな感じがします。右側の方が強く感じられます。

医師：なにか新しいことをしていますか。

女性：ベッドやおふとんと話をします。

医師：どんなことを話すのですか。

女性：もしもし，お元気ですか。

医師：そうしたらどんな返事がありますか。

女性：（ベッドやおふとん）はい，元気です。

医師：あなたはそれにどういいますか。

女性：それはいいですね。わたしを好きになってください。

医師：すると。

女性：（ベッドやおふとん）好きになってあげます。

医師：そうしたら，あなたは。

女性：うれしいわ。

女性：自分は人間でないから，人間のいないところでも，住めると思っていました。

医師：なぜですか。

女性：対人関係がうまくいきません。みんな，つんとしています。対人関係をうまくするために，お化粧をしました。

女性：感情がないから，おもしろくないです。

女性：いつの日かなにかこわいものがやって来そうな感じがします。目覚めていると不安です。

上の発言にはこの女性の現存在世界を読み解くためのことばがちりばめられている。彼女の閉ざされ硬化した心身の錠前を開けるのに適する鍵，その現存在理解のための次のような手がかりが見いだされる。その身体感覚とその左右アンバランス。ベッドやおふとんといった寝具類の人格化やその事物との会話。愛されたいという願望。対人関係の自己目的化。化粧とその目的。感情欠損。対人恐怖。「私」の喪失と「自分」への閉鎖的対象化。人間的自己の否定。過去からの強迫，将来における没落恐怖，それに現在の不在。覚醒不安と睡眠嗜好。存在に通底する不安。

彼女に「身が千切られそうな感じがする」のは，その身体が，生理的な痛みとは別に，自己解体

的に「身が千切られる」苦痛であり、身体表現と志向が乖離しているゆえの苦悩である。しかも、それが左側に比し右側が強いという方位の不均衡に脅かされており、そこには不安の結果がもたらした身体感覚がある。彼女はその内閉的な現存在の、いわばつまづき、「あやまれるずり落ち」(Verfall)をみせ、そこからの出口を求めている根本気分の情態を「身が千切れそうな感じがする」と告白する。この事例は、セシュエー(M. A. Sechehaye)が、症例ルネを記述したのと類似しているといえるだろう⁽⁸⁾。

この女性は、「非現実」のなかに落ち込み、その意識と現実との境界の断絶ないし混濁のなかで怯える。その結果、目前に存在する「ベッドやおふとん」という事物を人格に転移して接近した⁽⁹⁾。「好きになってあげます」という相手の返答に「うれしいわ」といって満足するが、彼女は、このいわば「あやまれる後退」(ver-rückt)をもってみずからの「あやまれるずり落ち」を顕わにした⁽¹⁰⁾。彼女がみせた「ベッドやおふとん」との係わりは、目前の「ものでつかむ」(Nehmen bei etwas)⁽¹¹⁾という、ピンスワンガーの分析視点の典型である。そこに現象しているのは、「ベッドやおふとん」がみせる物象の人間化と、彼女自身が演じている人間の物象化という倒錯である。

メルロ・ポンティ(Maurice Merleau-Ponty)が解明したように、たしかに、ひとは「世界における投錨地である身体」を用いて、たとえば精神といった実体を現実態にする。身体は「世界における存在の媒介者」、「世界把握の仲介者」となる。身体は他者に自己を表現し、かつ他者を理解する手だて、「道具」となる⁽¹²⁾。たとえば握手のように、外部の他者へ広がり、そこからまた自己に収斂する拠点となって、実存の「空間の充満」(Raum-Erfüllung)をもたらず実践的な「道具」となる。⁽¹³⁾

たしかに、「身体(Leib)は、実存が受肉するその場所である」が、身体は実存の条件であっても決して実存そのものではなく、身体が一定の空間を占めることでその現存在は満たされる⁽¹⁴⁾。したがって、身体は、一定の物理的質量もち、かつ事物として対象化しうる肉体(Körper)ようには位置しない。むしろそれは「世界内存在」にあつて現存在がいわばその座標系の上で展開する方向性の指示母体である。このとき、身体はなにものかへの志向性をもって意識と対自的に向き合い、その自己との同一化(Identifikation)をする⁽¹⁵⁾。「わたしは身体を『もつ』のではない。わたしは身体で『ある』」(マルセル(Gabriel Marcel))⁽¹⁶⁾。

この臨床例の女性の発言は、「不安」ではじまり、「不安」でおわっている。とりわけ最後の「不安」は深刻だが、不安そのものは、ハイデガーの言説では無対象であり、存在の時間構造としては将来と向き合う根本気分である⁽¹⁷⁾。しかし、「身が千切れそうに感じている」彼女には、身体と意識の志向が乖離・分裂し、その「不安」は、意識の志向性の実存投企がもつ先行きが見えないという「不安」である。彼女の身体は、「いうことをきかない。」その身体は、対自的でありえず、自分の

身体をサルトルのいう「対自－対他」(pour soi－pour autrui)として、「対他－身体」(corps－pour－autrui)の関係性と行為の位置を見いだしがたくなっている⁽¹⁸⁾。このためその実存は硬直し、その「世界投企の低下」が顕わになった⁽¹⁹⁾。

彼女は、存在論的には本来不可能な即自的身体へと「退却」し、そこへとまさに「身をひいた」。そしてその歪曲された自我世界(Eigenwelt)で「ベッドやおふとん」との「共同関係」をいわば恣意的に構成した。むしろ構成せざるえなかった、というのが正確だろう。この実存の弱さないし衰弱で「投企低下」した彼女の実存は、「生きられる」のではなく、ただ「物語られ」た。そこには、すぐれた文学作品がしばしばみせるような、豊かな想像力とことばとで紡ぎだされる形象はなく、むしろ歪んだ思惟の「魔術」が生み落とされている。彼女は自分の閉ざされた世界の「ベッドやおふとん」のまえで魔術師であり、この恣意的に構成された「教会」の祭司、あるいは仮想的舞台の演出家にしてヒロインである。この魔術化もつまづき、その貧しい世界へのあやまれる落ちこみの結果であって原因ではない。物語られたのは、物象化の精神に表れた「ひとりごと」である。

分裂病を記述し、その解釈モデルに「現実との生きた接触」(contact vital avec réalité)を提起したのは、ミンコフスキー(Eugène Minkowski)だった。この概念は、彼自身もいうように、ジャネ(Pierre Janet)の「現実機能」(fonction de reel)と、ベルクソン(Henri Bergson)の「生の跳躍」(elan vital)とを結びつけてつくられ、その衰弱ないし消極態が精神分裂病と規定された⁽²⁰⁾。これを外部現実的存在としての実存(Existenz)の方向づけでとらえるなら、自己が他者の「もと」(bei)にあり、「とも」(mit)にありながら、その「生きた接触」の動態には、いわばモメントとして感情や情念が随伴する。しかし、分裂病にあつてはそのための「感情的ラポール」(affection rapport)や「共感」(Sympathie : M. Scheler)は欠損し、「個別化された気がかり」(individuelle Besorgen : L. Binswanger)のなかにその実存は没落せざるをえない⁽²¹⁾。この落ちこみは病める者には、構造要因であるが、他者へと「共に加わる／伝えること」(Mit-teilen : L. Binswanger)⁽²²⁾に困難し窮迫することもあれば、目前にあるものへの無関心や、感情の低下をみせ、ことは「どうでもいい／同じ」(gleichgültig)ことになる⁽²³⁾。ミンコフスキーの症例の女性はこう告げる。「わたしはわたしの場所は知っています。けれどもそれがわたしのいるところという感じがしません。」⁽²⁴⁾

このような現象は、われわれの女性の発言「感情がないから、おもしろくないです」でも端的に示される。「おもしろくない」(uninteressant)のは、積極的な意味での関心ないし興味(Interesse)、さらにいえば文字どおり「相互的にある」(inter-esse)ことの通減、喪失、放棄に由縁する。そこにはことがらなし事態に対しておもしろさをもつという究極の意味での「生への係わり／場所とり」(Einsatz)がみられない⁽²⁵⁾。存在論的にははみだしえぬ自明性は保持されながらも、ことばの原義で解釈学的にとらえられる人間、つまり人の中にあるものとしての「人間」(和辻哲郎)からの

遠ざかりの現象をみせる。これらの症例にみられるのは、生理的な機能不全でなく、「生との接触」の不全ゆえに、失われた存在の「いま—ここ」の時空の収縮である。

女性が、「みんなつんとしています」と、訴えるのは、ひとが彼女にたいしてそうなのではなく、実は、彼女が彼女に、いうならば、「わたしがわたしに つんとしている」よそよそしさの情態である。彼女がそう感じるのは、生を生きているのでもなく、死を死ぬのでもない、「生を離れている」(ab-leben : L. Binswanger) からに他ならない。彼女は「世界にありながら世界を超える存在」⁽²⁶⁾ へと向かわない。むしろ、世界にあることを乗り越して世界を超えることを先取りしようとした。つまり、なかをつききって「超越」するのでなく、ただ「通過」に執心した⁽²⁷⁾。「みんなつんとしている」のに直面するが、それが「対人関係がうまくいきません」という告白になる。しかも、以前は「自分は人間でないから、人間のいないところでも住めると思っていました。」そこでは他者との背離関係が設定され、それを「あれか—これか」の二者択一で強迫的に意識化し、その選択を迫られて、「非人間」へと退いている。

自他をめぐる関係やその閉鎖的世界は、つとにナルチシズムやフェチシズムなど、精神分析の対象として読み解かれてきたが、文学作品としてもその様態の極限を描く人間像が創作されてきた。たとえば、1956年、三島由紀夫が発表した『金閣寺』は、その描出でこの京都の精神医学者たちをうならせし、のちにこの作家自身がその世界を自死をもって示したともいえる。また、ドストエフスキー (Fyodor Dostoevskii) の『地下生活者』や『悪霊』などの主人公、リルケ (Rainer Maria Rilke) の『ドヴィノの悲歌』の作者、ヤコブセン (Jens P. Jacobsen) の『ニールス・リーネ』、カフカ (Franz Kafka) の作品一連のKたち、カミュ (Albert Camus) の『異邦人』など、これらの諸作品の主人公でさまざまに極限の様態が描写されてきた。哲学などはそれをむしろ後追いし概念化してきた経過は知られるとおりである。これらの文学的主人公は、地下や地上の世界の不気味さや、天上や想像力の世界へ駆られる「イデー」(観念)に憑かれ、そこでの自らの現存在の高さと幅、その垂直と水平とが直面する不均衡を端的に示している。かれらが高まるか深まるかの場合、高さが高まれば、幅は縮小され、幅が広まれば深さは浅くなった。そこに共通するのは、高まりや深まりのなかでの、その幅の狭まりであり、その点ではドン・キホーテと対照的である。

さらに上の作品群の主人公や本稿での症例が問題なのは、ハイデガーやビンスワンガー、ブランケンブルクのいう存在論的には捨象できない共同存在の可能性や、それに依拠して分裂病の現象を摘出する自明性喪失にもかかわらず、それを捨てみずからの「意識」の次元でおこなっている操作にある。つまり具体的、実践的、動的なものとの係わりやあずかり(関与)を断ち、抽象的、非実践的、非生産的、静態的な係わりのなかに己れの自己定位をしていることである。逆にいえば、「実践的価値」(valeur pragmatique : E. Minkowski)⁽²⁸⁾ を欠落させるかぎりでのその現存在が「達成」され

ていることに問題がある。それは、存在可能性（Seinskönnen）が覆われてみえず、外部への行為（Verhalten : Karl Löwith）⁽²⁹⁾ を生きないかぎりでえた帰結にすぎない。

臨床場面での女性が、その程度においては素朴な病態だったが、「自分は人間でないから、人間のいないところでも、住めると思っていました」というのも同じである。彼女は、その閉ざされた世界に仮想舞台をしつらえ、「ベッドやおふとん」という自分の身体の置き場、睡眠と休養の道具を相手にするという設定をした。その現存在は、高まりも深まりもせず、ただ幅の狭まりだけを顕在化した。

彼女は、日常の対人関係で相手が「つんとしている」のをみて、「化粧」もするが、依然として「ベッドやおふとん」という擬似的人格と係わっている。このような現存在のありようは、ビンスワンガーのいう「失敗した現存在」（missglücktes Dasein）のそれである。対他関係からの逸脱やその回避の極限では、観念奔走や妄想的高揚があらわれ、「現存在の充満」（Daseinsfülle）とは逆に、むしろ空虚な「現存在の膨満」（Daseinsvolle）を示すしかない⁽³⁰⁾。この歪みは、ヤスパース（Karl Jaspers）がしたように了解不能として排除されず⁽³¹⁾、ビンスワンガーの現存在分析では、こう捉えられる。つまり、彼女は自己の「防衛的な保護」（Deckung）様式を経験との一貫性を排除して作り上げている。それは「これ以上重荷を負わされないようにする実存の弱さの表現であり、様態である⁽³²⁾。その思惟は、一種の「自我関係症」（Ichbezogenheit）⁽³³⁾ に落ち込んでいるために、現実的でも実践的でもない。このような自他関係での身体は、いわば部品のメカニズムのように自他個々に設定され、そのシステムの抽象性と化す。そして、現実と非現実、リアリティとフィクションが融合し、リアリティはむしろフィクティブに「構成」された。彼女は「ベッドやおふとん」と語るが、その関係はひとをさがす彼女にはリアリティをもち、その語りの相手がひとでないことではフィクションのままである。しかもそのコミュニケーションは、日常の生活世界から隔離されてコロニーと化した病棟と病室というシステムの擬似世界にあるままである。

たしかに、単独的な自我世界を対象他者と同一視して進める神秘的絶対化の試みは、信仰における至福、権力におけるイデオロギー、芸術における美などにみられ、その系譜は普遍的である。『或る阿呆の一生』で「人生は一行のボードレールにしかない」と吐かせた当の芥川龍之介は、外部から一種絶対的な力で迫ってくる強迫観念のまゝで自死した。このような観念を消去するためには、自他双方の対象に攻撃的に踏み込むか、それから逃れて、「内部」で勝利を組立るしかない。たとえば、自他いずれかの消去か破壊のために、そのシンボルである火が手段として用いられる。そのひとつとして、「金閣（寺）は焼かれねばならぬ」のであり、放火行為に踏み込む「必然」（müssen）は、「当為」（sollen）にまで転化される。また、もうひとつの手段としては、攻撃の矢は対象他者に射られるとはかぎらず、むしろ多くは当の自己に向けられる。ヤコブセンのニールス・リーネはその

情熱によって自殺し、ピンスワンガーの症例エレン・ウェストも自ら命を絶った⁽³⁴⁾。さらにドストエフスキーの『悪霊』のキリーロフは自己を記念碑的に英雄化した結果、いわば「論理的自殺」を必然化し、情念と論理との両方に憑かれて自死した。これらの場合、すべてが情熱や論理をもって攻撃の対象を事物や自己に向けただけでなく、その現存在の次元では自らの行為を「なにものかで捉える⁽³⁵⁾」ことで、そこに「てらい」(Verstiegenheit)やファナティズムを招き入れ、それゆえの高揚や没落、しかもあやまれるそれが演じられている。

3：ある男性入院者（23歳，男性） —現存在の時間の構造—

臨床授業では、京都のある名刹の内装に火を付けた件で、精神鑑定のために入院していた20代前半の青年が登場した（1964年1月7日）。かれは、入室するなり学生の服装に対し羨望めいた揶揄をした。その表情、言葉、感情などで、ことごとくに軽さを振り撒きながら、自分の行為をあたかもひとつごとのように軽々としゃべり、止まるところはなかった。そのなかで、かれは「千年ほど前、唐の時代の中国を旅行した」、とって自らの特異さを語った。医師と学生に虚ろな視線を投げかけながら自分の行為をさらりといつてのけるかれは、自分がそうだったという物語に事実を重ね合わせる。たとえそのような事実が不可能であり虚偽だとしても、その語りのほうがむしろ事実を構成する。これがかれの世界とその現存在のありようである。

この青年はその現存在の「想起」(Reminiszenz)が過去の一方向に転移した歪みを示し、「千年ほど前」に安住する。かれの、歪み落ち込んだ現存在の時間構造の全体形態には障壁(Hemmung)がかかり、それが回想であれ、希望であれ、パースペクティブをもてないでいる⁽³⁷⁾。この場合、その時間は現存在の展開の形式原理としては機能しない。前出の女性の空間が内閉的、静的に固着したのと同様、かれの時間は停止したり、進み過ぎたり、遅れすぎたりし、さもなければ過去か未来の一方向にいたずらに「病的肥大」(ミンコフスキー)を示す⁽³⁸⁾。かれには、日常場面でいえば、なつかしさや郷愁といった感慨にひたり、過去を現在化することで今を充実させることはない。もちろん、ブルースト(Marcel Proust)がその大作『失われた時を求めて』で細密かつみごとに描き出したような、回想された過去が「見出された時」として今をいわば「時熟」(zeitigen)させたような成果はない。また、この男性の時間のパースペクティブは、過去の「反-復」(Wieder-Holung)をもって「いま-ここ」と将来の人生のステージや信仰を強化した、キェルケゴールの分析のような、実存の弁証法とも無縁である。

むしろこの青年は、「千年前の自分」を話す「歴史=物語」(Historizität)⁽³⁹⁾のなかに住まう。そこでのかれは、いわば過去の現在に、つまり現在を過去に移し入れて生きるが、逆に現在の過去、つまり過去を「見いだされた時」として現在に引き入れては生きられない。換言すれば、過去を現

在に再度喚起して「反-復」しない。もういちど現在を過去に戻して、その後方に「再-帰」(Wieder-Kehr)しているにすぎない⁽⁴⁰⁾。こうなると、かれにはハイデガーが分析したように、とき(時間)は先方から到来し「生起する」(geschehen)こととしての実存の歴史化(Geschichtlichkeit)⁽⁴¹⁾は放置されたままである。かれは、自分の行為を「悔恨」でもってとらえ、その現存在を収縮させることはないが、逆に非常な誇らしさと仮想の生き方を選び、それが周囲に「軽さ」を散布している。

この青年の現存在が「充満」するのではなく、ただ「膨満」になるのは、過去のかなたに自分の舞台を設け、そこでの話づくりに専念しているからである。これをイデオロギーとしていえば、ひとが自己を待望されるべき未来に投じ、いうならばキリスト教的千年王国^{ミレニアム}への行動主義的な待望、仏教的涅槃^{ニルヴァーナ}の瞑想の悟道、あるいは左右両翼の政治的ユートピア思想のように、歴史のなかには事例はこと欠かない。しかしかれは、前方へ駆け出るのでなく、後方へ退く。前方と後方とのせめぎあいのなかにあるのがその現存在の時間の構造だが、このような引き裂かれた現存在時間のもちよすら断たれるなら、次は一時的瞬時性(Plötzlichkeit)の真ん中に心身を投げ入れ、己れを燃焼させよう。かれは忘れないし脱自(Ekstase)の状態にあつて熱狂的行為をし、そのまえでつまづく。そのいわば茫然自失している時間様式は、ヴァイツゼッカー(Viktor von Weizsäcker)のいうように、時計が刻む「物理的でメカニクな時間」の「同質的連続性」にあり、かつ生活日常の「常軌」(routine)とは逆だが、その実存の生起の「時が熟する」(zeitigen)ことやその瞬間の「持続」(Dauer)といった全体形態^{ゲシュタルト}からも遠のいている⁽⁴²⁾。

「経験」(Er-Fahren)は、文字どおり世界における行為の進行過程とその方向の選択の基本である。世界が現存在を根拠づけ、そこでの場所をとる態度や行動の方位の総体が経験であり⁽⁴³⁾、その点で現存在を顕にする意味である。症例がみせた経験のありようは、しくじって自ら「作り上げた世界」へ落ち込み、その経験に歪みを生じ、失敗している現存在の様態であった。それだけにこの分析を生理的、社会的、文化的、歴史的などの知見でもって健康な者と病める者、正常者と異常者といった二項対立的な分類をするのは、表面的であるほかに、注意すべきであろう。

知られるようにピンスワンガーやボス(Medald Boss)、さらに部分的にはブランケンブルクによる症例分析の基盤は、ハイデガーが1920年代半ばのマルブルク大学で練りあげていた存在理解の解釈学に負うところが大きかった。たとえば、「他者もまたわれわれとともに実存する」⁽⁴⁴⁾、とボスがいうとき、ハイデガーに即していえば、他者は自己の「目前に存在するもの」(Vorhandenes)としてその関心のもとにながめられるが、それは人格関係や道具関係から中立的な、「共存」(Mit-sein)の基礎的事実である⁽⁴⁵⁾。一者と他者も「世界-内-存在」においては、まず、この「共存」の基盤のうえにあり、その自他の関係は、たとえばヴァイツゼッカーがいう「ふたりにとって」(für beide)の全体的形態圏(Gestaltkreise)⁽⁴⁶⁾や、ブバー(Martin Buber)がいう「我あつて汝あり」よ

りも「汝あって我あり」、および存在の根源語とする「我々であること」(Wirsein/Wirheit)に基礎づけられている⁽⁴⁷⁾。また、ビンスワンガーもハイデガーに根拠づけられてその「相互的な様態」(Mit-ein-ander-sein)やいわゆる「我-汝の出会い」(Ich-Du-Begegnung)を展開した⁽⁴⁸⁾。その点で、症例の分析や治療に係わる人間存在の基礎認識では、ヴァイツゼッカーとビンスワンガーとは共通する。前者には「一人でありながら二人である人間」(ein zweisamer Mensch)、後者には「一人における二人」「二人における一人」(Zweisamkeit in Einsamkeit, Einsamkeit in Zweisamkeit)、これが、存在の可能性とその展開の様態からみたかれらの人間存在の規定である。⁽⁴⁹⁾

先の女性は臨床でこういつている。「自分は人間でないから、人間のいないところでも、住めると思っていました。」彼女が「住める」というのは、ひとのいる家屋でなく、単なる空間の域にすぎず、過去においてこの女性は、存在の関係性の基礎事実から遊離して、己れの現存在の場を狭めてきた。これも「気がかり」を打ち消すための、あやまれる「自己実現」への努力であり、彼女が「人間でないから」を前提にして「住めると思っていた」という帰結である。いうならば、接続法の文法様式のように彼女は非現実の上にとっていた。したがって、いま彼女が人間であるなら「住めない」というジレンマにあり、それゆえのダブル・バインドで現在を苦しんでいる。しかも、「いつの日かなにか可愛いものがやって来そうな感じ」で、なおその将来は脅かされている。この症例は、ハイデガーが実存の決断性や不安(Angst)を存在論的に基礎づけて、その時間構造から過去にたいする将来の優位をとり出したこと、ベルクソンが「生の飛躍」をもつ「創造的進化」でもそうとらえたことと、表裏両面に対応する。

ビンスワンガーやミンコフスキーなどが病める者の様態から抽出したのは、将来なき行為である。本稿の男性の場合はその過去が肥大し、それに縛られ、「千年前の中国」へ飛びたった。過剰なまでの己れの意識化、悔悟、名誉など、これらのトラウマや観念がかれを拘束し、「千年前」へ飛翔させた。そこでは、過去を「もった」が、将来に「なす」すべを欠いている。「もつ」より「する」、その行動の運動性^{モトリック}を低下させている⁽⁵⁰⁾。

実存の時間は、過去、現在、未来が連関しながら、しかもその三つ時制を超越して、全体的な形態化をするところにある。その空間形態化でも「ここ」は「あそこ」からは分断されない。この様態が、行為一般、たとえば祈りや美などの、いわば陶酔的脱自にもみられるのは、祈りのカイロース(永遠)を説くティリッヒ(Paul Tillich)、ファウストに「時よ、止まれ」と叫ばせたゲーテをまつまでもない。それは、いわば人間学的契機であり、これをシュトラウス(Erwin Straus)は精神医学的理解に導入した⁽⁵¹⁾。人間の自己生成は、ひとで「ある」ことからひとに「なる」ことの、いわばあかしの経験過程であり、「いま-ここ」をのりこえる意味での超越と否定との契機をはらんでいる。それは時空全体への関わりに与ることをもって条件とし、そこでの「生きられた時間と生きる

れた空間」の充足が、文字どおり、根源的に生きる（er^{er} leben）という「体験」になる。このときの体験は、たとえば正確に位置関係を示す地図をたどる旅程からはえられない。むしろ動き眺め立ち止まり、動きながらその風景にひたり、ひとに問いかけ、ひとから聞きとることでの充足で獲得される⁽⁵²⁾。

「千年ほど前、唐の時代の中国を旅した」とっていた男性の場合には、上にいった構造の片鱗もない。かれは自分が現にいる時代と位置、その光景やその道づれなどについて一切関知せず、「千年前の中国を旅した」という不可能さを可能にしたという妄想にとらわれている。また、「ベッドやおふとん」と話す女性も、その過去において「人間のいないところでも住めると思っていた」し、現在にあってその緊張で混迷し、その未来には「なにかこわいものがやって来そうな感じがする。」このふたりには時間のダイナミックスは失われている。

4：まとめとみとおし

以上、分裂病の臨床例を現存在分析の方法でとらえてきた。本稿では、方法論上の基礎理論への言及が多く、それが臨床論文の通常の形式からは逸れているのも、たしかである。しかし、それには次の理由があった。ひとつは、近年、その浮上がめざましい臨床心理ないしカウンセリングや臨床教育学関係の論文を散見するが、その理論分野の水準には必ずしも満足させられないこと⁽⁵³⁾、もうひとつは、実践的な教育学の一般理論でも、従来からの倫理的道德教育論はいわずもがな、社会学の導入ないしそれとの提携している場合が、臨床心理分野の興隆の前でその評価を下げていくかにみえることである。このような理論一般の弱さやその狭い枠組を再考してみたいと、あえて旧稿を持ち出すにいたった。

本稿の女性の場合、その談話の相手はひとでも動物や人形でもなく、ベッドやおふとんであった。これらは彼女がその身を横たえ、頭を置き、体をおおう道具である。また、通常、昼間から遮断された夜間に、活動の前後の休眠のために使用される道具である。しかし、寝台や寝具という、顔をもたぬ事物をそれでもなお己れの重要な他者とし、話相手とした。そのさい、彼女の方からまず相手に問い掛け、先方からの応答を受ける形をとったが、そこには問いが先行し、他者が先在する。相手に「お元気ですか」、とたずね、その元気という価値を「いいですね」と応じ、この寝具という他者を受容した。たしかに、彼女は好きになるよりも好きになられることを演じていたのだが、一方にそこまで追い込まれた彼女の実態があり、他方にそこからの抜け出たいという願望があった。面前の医師に伝達や訴えをする彼女には、人格化した事物からの問いに答える応答、言い換えれば責任（Ver-antwortung）の場面はまだない。しかし、自他がことばを介してそれぞれに場を構成し、「態度をとる（ein-stellen）ものとしての人間」（Arnold Gehlen）でありかぎりでは、そこには対

話原理と人間学的構造はくずれていない⁽⁵⁴⁾。

こうみれば、精神病理は実体そのものではなく、あくまでゆがみであり障害である。それはあくまで「自分は人間でないと思っていた」にすぎない。かりに分裂病と診断され、社会が「狂気」のラベルを貼るとしても、彼女の人間そのものの非人間化ではなく、現存在がその変容の一面をみせたにすぎない。人間の喪失ではなくて、「世界-内-存在」での現存在の「歪んだ世界化」(Verweltlichung: L. Binswanger)をし、その世界領域での「遁滅」の現象形態が、現存在分析では、病理的であったにすぎない。ハイデガーの存在論を人間学に移して考察したレーヴィット(K. Löwith)に即していえばこうなる。この女性は、関係性のなかで現象する、人間と人間との共同世界(Mitwelt)、人間と事物との環境世界(Umwelt)、人間がその己れと向き合う自己世界(Selbstwelt)という三つの世界で、そのいずれにもつまづいき、失敗し、あるいは閉ざした結果、世界化の倒錯ないし自我世界(Eigenwelt)へのあやまれる落ちこみを示したと⁽⁵⁵⁾。

同様にハイデガーの存在論的と存在的とに二分する方法論の基盤にたつて現存在分析を提起したビンズワンガーにあっては、その基礎理論の構築プロセスからすれば、精神分析の視点の導入もさることながら、大著『人間の現存在の基本形式と認識』でみせた、人間の認識、感情、行為を分析した人間学上の透徹した位置をとらえ、その現存在の分析が豊かにされていった。臨床の女性の場合も、「手もとのもの」「目のもの」にある関心の情態性をみすえて、それを即物的な「なにものかで捉える」か、あるいは「愛しながらの共同相互存在」(liebendes Miteinandersein)をするか、このふたつのうちで、彼女は前者の「なにものかで捉える」者として病理的なありようをみせた。存在論的にいえば、病理であれ、いわゆる狂気であれ、現存在の可能性の様態であり、人間学的にはひとつの人間像である。それは人間の自然史の必然ではなく、現存在の生起(歴史)にみとれる可能性であり、それゆえにまた回復の根拠も内在させている。

ギリシアの悲劇作者ソフォクレス(Sophokles)が、オデッセウスにむかってアイアスの狂気をアイアスだけのものではなく、「彼奴の身の上はやがてわがこと」として理解させた意味は深い。そこでは神話と人間存在とに通底する基盤が押さえられ、合唱が観客であるアテネ市民の声とされて、対立を和解させる契機とする見地と手法をもっていたからである。この対立和解の契機を、キェルケゴール(Søren Kierkegaard)は不安を実存の可能性としたが、サルトルの場合は、個別的主観の実存史をこえて、むしろ状況参加をして客観史を造るために主体をその不安と自由との二者の選択のまえに連れ出し、それによって不安が自由の根源的可能性であることをいわば裏面から根拠づけた。もし、不安がないとすれば、自由の可能性を放棄した「自己欺瞞」(mauvaise soi)でしかなく、その実存分析をかれは提唱し実行した⁽⁵⁶⁾。また、ハイデガーの場合も、非人称中性名詞と化した「ひと」(das Mann)が陥る非本来性へあやまってすり落ちる道その現存在の時空の根本情態である

不安の隠蔽化とみていた。

たしかに、ハイデガーやヤスパース、さらには日本の教育学に一大影響を残したボルノウなど、かれらがいう「本来性」をアドルノは単なる「ジャルゴン」(冗言)だと指弾する⁽⁵⁷⁾。それは時代のなかで規範的、倫理的なイデオロギーに転化したからである。その後、フーコー(Michel Foucault)は、該博にして先鋭的なその歴史分析で、病院や監獄の誕生の局面をとらえつつ、その臨床的施設の制度化が進行し、学校も訓練の施設として拡充されて、これらが近代の社会システムのなかで定位置をもっていることを取り出してみせた⁽⁵⁸⁾。こうしたなか、病める者は社会的排除の対象としてラベルがはられ収容されて、今日に及んでいる。極論すれば、人権とヒューマニズムでもってするかれらへの対応や規範意識も現代の社会システムがもちこんだ、あやうい補償と映りかねない。いわんや、社会学的にみて平均からの逸脱や偏差で異常を規定する調査の方向は問題外である。ビンズワングァーの現存在分析はこのような方向になじまず、また病理や異常を認知、行動、情緒、生理などの機能不全とする見地にも同調しない。その点で後期ハイデガーに依拠したブランケンブルクの「自然的自明性の喪失」の理論や⁽⁵⁹⁾、精神病理への理解に東洋の思想と文化の立場から捉えることに希望的展望をいう木村敏などは興味深い⁽⁶⁰⁾。社会システムの危機管理のために検査や診断を拡大するよりも、これからは現存在をそのリアリティと可能性でとらえる深さへの知見をもつ方が、多様で歴史的な文化総体としての家族、学校、社会に共同性や寛容の輪をひろげるのに寄与するとみられる。

引用文献：

- (1) ソフォクレス：「アイアス」(124)，藤沢令夫訳 呉茂一他編『ギリシア悲劇全集』2，1963，40頁
- (2) Binswanger, L. Grundformen und Erkenntnis menschlichen Daseins, 1956, 3. Aufl. (1942) ; Ders : Drei Formen missglückten Daseins - Verstiegenheit, Verschovenheit, Manieriertheit -, 1956 ; Ders : Ausgewählte Vorträge und Aufsätze, Bd. 2. - Zu Problematik der psychiatrischen Forschung und zum Problem der Psychiatrie -, 1955
- (3) Bachmann, W. : Die anthropologischen Grundlagen zu Pestalozzis Soziallehre, 1947 ; Rang, A. : Der politische Pestalozzi, 1967
- (4) Miyazaki, T. : Pestalozzi und seine Lektüre, 1992, S.15~31
- (5) 宮崎俊明：思想の理論化と理論の思想性 - J. Habermasの思想過程と教育理論への示唆 -, 鹿児島大学教育学部研究紀要, 32, 1981, 215~273
- (6) この大学でハイデガーは1920年代後半の哲学教授として『存在と時間』を講義し、ハバースは『公共性の構造転換』で教授資格を獲得した。ブランケンブルクは医学部門の教授である。
- (7) Kimura, Bin : Bemerkungen zur Psychopathologie heute in Japan und Deutschland unter besonderen Berücksichtigung der medizinischen Anthropologie, 1999 (unveröffentlicht)

- (8) Sechehaye, M. - A. : Journal d' une Schizophrène, 1950, 村上・平野訳『分裂病少女の手記』
- (9) van den Berg, J.H. : The Phenomenological Approach to Psychiatry, transl. by C. Thomas, 1955, p. 16
- (10) Binswanger, L. : Grundformen und Erkenntnis menschlichen Daseins, 1956, 3. Aufl. (1942), SS. 476, 160
- (11) Binswanger, L. : dito. (10), S. 273 ff
- (12) Merleau-Ponty, M. : Phénoménologie de la perception, transl. by C. Smith, 1962, pp. 82, 235, 144, 164
- (13) Binswanger, L. : dito. (10), S. 307
- (14) Merleau-Ponty, M. : dito. (12), p. 164
- (15) Binswanger, L. : dito. (10), SS. 450, 469
- (16) Marcel, G. : L'être et avoir, 1934, 渡辺訳『存在と所有』 228
- (17) Heidegger, M. : Sein und Zeit, 1927, 桑木訳『存在と時間』 上, 76以下
- (18) Sartre, J. - P. : L'être et le néant, 1948 (24. ed.), 松浪訳『存在と無』 II, 189以下
- (19) Binswanger, L. : Schizophrenie, 1957, 新海訳『精神分裂病』 II, 213
- (20) Minkowski, E. : La Schizophrénie - Psychopathologie des schizoïdes et des schizophrènes -, 1957, 村上訳『精神分裂病』, 213
- (21) Minkowski, E. : dito. (20), 29 ; Scheler, M. : Wesen und Formen der Sympathie, 1923, S. 80 ; Binswanger, L. : dito, II, (19), 265
- (22) Binswanger, L. : dito. (19), II, 229
- (23) Binswanger, L. : dito. (19), II, 230
- (24) Minkowski, E. : dito. (20), 82
- (25) Minkowski, E. : dito. (20), 82
- (26) Binswanger, L. : dito. (19), II, 186
- (27) Binswanger, L. : dito. (19), I, 146
- (28) Minkowski, E. : dito. (20), 182
- (29) Löwith, K. Das Individuum in der Rolle des Mitmenschen - ein Beitrag zur anthropologischen Grundlegung der ethischen Probleme -, 1928, S. 25
- (30) Binswanger, L. : Drei Formen missglückten Daseins, 1956, S. 30
- (31) Jaspers, K. : Allgemeine Psychopathologie, 1913, 内村訳『精神病理学総論』 上, 142
- (32) Binswanger, L. : dito. (19), I, 16
- (33) Binswanger, L. : dito. (19), II, 97
- (34) Binswanger, L. : dito. (19), I, 177
- (35) Binswanger, L. : dito. (10), S. 179 ff
- (36) Binswanger, L. : dito. (10), S. 173 ; Ders : (30) S. 1ff
- (37) Weizsäcker, V. v. : Gestalt und Zeit, 1960 (2. Aufl.), S. 22
- (38) Minkowski, E. : dito. (20), 176

- (39) Binswanger, L. : dito. (19), I, 204
- (40) Binswanger, L. : dito. (19), II, 225
- (41) Heidegger, M. : dito. (17), 下, 372以下
- (42) Weizsäcker, V. v. : dito. (37), S. 22
- (43) Binswanger, L. : *Ausgewählte Vorträge und Aufsätze*, Bd. 2, 1955, S. 183
- (44) Boss, M. : *Psychoanalyse und Daseinsanalytik*, transl. by L. Lufebre, 1963, p. 45
- (45) Heidegger, M. : dito. (17), 上, 135頁
- (46) Weizsäcker, V. v. : *Zwischen Philosophie und Medizin*, 1957, S. 169
- (47) Buber, M. : *Ich und Du ; Element der Zwischenmenschlichen*, S. 278 ; Ders, *Das Wort*, in : *Werke 1*, 1962, S. 87
- (48) Binswanger, L. : dito. (10), S. 23 ff
- (49) Weizsäcker, V. v. : dito. (37), S. 169 ; Binswanger, L. : dito. (10), S. 133
- (50) Sartre, J. - P. : dito. (18), III, 281以下
- (51) Straus, E. : *Psychologie der Menschlichen Welt*, 1960, S. 141.
- (52) Straus, E. : dito. (51), S. 316
- (53) 一例をあげれば, 實川幹朗 : *心理臨床における世界の現実性と多元性 - 「臨床世界学」の提唱 -*, *心理臨床研究* 16-5, 1998, 441~452
- (54) Gehlen, A. : *Der Mensch - seine Natur und seine Stellung in der Welt -*, 1958, 6. Aufl., S. 17
- (55) Löwith, K. : dito. (29), S. 60 ff.
- (56) Sartre, J. - P. : dito., III, 281以下, I, 151以下
- (57) Adorno, Th. : *Jargon der Eigentlichkeit - Zur deutschen Ideologie -*, 1967 (1964), S. 13 ff
- (58) Foucault, M. : *Naissance de la clinique - une archéologie du regard médical -*, 1963, 神谷美恵子訳『臨床医学の誕生』 ; *Surveiller et Punir - Naissance de la Prison -*, 1975, 田村訳『監獄の誕生』
- (59) Blankenburg, W. : *Der Verlust der natürlichen Selbständigkeit - Ein Beitrag zur Psychopathologie symptomarmer Schizophrenien -*, 1971, 木村ほか訳『自明性の喪失 - 分裂病の現象学 -』
- (60) Kimura, B. : dito. (7)

参考文献：

- Gehlen, A. : *Anthropologische Forschung - Zur Selbstbegegnung und Selbstentdeckung des Menschen -* 1971 (1965)
- Giel, K. : *Philosophie als Anthropologie*, in : A. Flitner (hg.), *Wege zur pädagogischen Anthropologie*, 1963
- Goldstein, K. : *Der Aufbau der Organismus - Einführung in die Biologie unter besonderer Berücksichtigung am kranken Menschen -*. 1934,
- Kretschmer, E. : *Psychotherapeutische Studien*, 1948, 新海訳『精神療法』
- Laing, R. - D. : *The divided Self - A Study of Sanity and Madness -*, 1960
- Minkowski, E. : *L'temps vécu*, 1933, übs. v. M. Perenz, *Die erlebten Zeit*, 1977

Plessner, H. : Die Stufen des Organischen und der Menschen – Einleitung in die philosophische Anthropologie –, 1928

Ders : Lachen und Weinen – eine Untersuchungen nach Grenzen menschlichen Verhaltens –, 1950

Ders : *conditio humana*, 1961

Schneider, K. : Zur Einführung in die Religionspsychopathologie, 1929

Straus, E. : Vom Sinn der Sinne – ein Beitrag zur Grundlegung der Psychologie –, 1956, 2. vermehrte Aufl.

Toshiaki MIYAZAKI : Struktur des menschlichen Verfall unter Berücksichtigung der Daseinsanalyse von schizophrenen Patienten

1 : Vorbemerkungen – persönliche –

2 : Eine interne Patientin (Jahrgang 26) – ihre Raumstruktur –

3 : Ein interner Patient (Jahrgang 23) – seine Zeitstruktur –

4 : Zusammenfassung und Aufgabe

(Bulletin of Kagoshima University, Faculty of Education, 51, 2000, Japan)